

朝  
ひらく

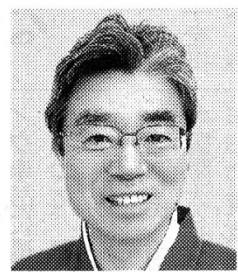
「お父さん、これ誕生日のプレゼント」。開けてみるとビックリ、額に入った私の遺影であった。

「お父さんの葬式用に使って、これで安心やね」と、悪びれもない顔で娘は言う。複雑な気持ちで、まだ遠慮を過ぎたばかりの父親の、葬式のことを考えていたとは!

今までに職業柄、数多くの遺影を見てきた。でも、そのほとんどがピンボケや、不自然な形で切り取られたものである。これはいいところに目をつけたのだ。さすがお寺で生まれ育った娘

## 素の顔写真

永田 円了  
真国寺住職



だ!と、ヒザを打って娘を褒めた。

それを機に、娘夫婦は副業として「素顔の生前遺影」を撮るようになつた。コンピューターの画面に並んだ編集前の写真を見て驚かされる。被写体が一人の人物であるにもかかわらず、100人の違つた人たちがいるかのように、一枚一枚が全て違うのである。つくり笑いの顔、控えめの顔、虚勢をはつた顔。でも不思議なことに1

00枚目ぐらいには、その人の素の表情が一枚ぐらいは写し出されている。

「何か心のレントゲンを観てみた」と娘は言う。なるほど、医者は内臓の写真を撮つて身体の状態を見る。顔写真はその人の心をチェックするものなのか。

100枚取ると、その人の100通りの、人生に向かう意識の表情が炙り出される。そのうちの一枚は、本人でも気付かない、もう一人の自分の姿。「ええつ、こんな自分がいたのか」と畏怖と敬意をもつて迎えられる「いのち」の姿が出現する。

絵本「100万回生きたね」(佐野洋子著、講談社)では、主人公のとらねこは、100万回死

んで100万回生きる。しかし、一度も泣いたことがなかった。本来の自分を生きてこなかつたからである。でも最後には最愛の白猫が死んで初めて泣く、100万回泣き続ける。それ以後一度と生き返ることはなかつた、というストーリーである。

本当の自分を見つけるために、かくも多くの生き方を試行錯誤しなければ人生は完結しないのか。人生は一度、そんなに何度も生きられない。でも大丈夫である。生前遺影撮影では100万回ならずとも、100回程度の人生を超高速デジタルで再現できる。その中に、一枚は眞の自分、樂屋裏で出番を待ち続けていた自身の「いのち」を見つけることができる。

最後の晴れ舞台にふさわしい一枚の遺影が、とつておきのあなたの今を照らし出す。

# 「いのち」の姿が出現